慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西鶴晩年の動向
Sub Title	Saikaku's mindset during his final years
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.50, (1986. 12) ,p.91- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00500001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西鶴晩年の動向

檜谷昭彦

1 『難波みやげ』の示唆する意味

元禄六年(一六九三)正月、大坂の雁金屋庄兵衛と京都の松葉屋平左衛門および江戸の万屋清兵衛の三書肆は、相板で俳書『前句諸点難波みやげ』一冊を出版した。大坂住、静竹窓菊子の編になるもので、「松寿軒西鶴翁点墨」を西鶴の評語を加えて巻頭に収めた俳書である。

この西鶴の点を得た前句附の、西鶴の題句と評語には、西鶴晩年の作品『世間胸算用』(元禄五年正月刊、大坂伊丹屋太郎右衛門・京都上村—松葉屋—平左衛門・江戸万屋清兵衛版)所収の短篇の描写に酷似した文言が見出せるのである。それはすでに野間光辰氏の指摘されたところだが(1)、いま私が関心をもつ数点をまず引用して、後の考察に備えることにする。引用は、(西前)として西鶴の前句を挙げ、次に菊子の附句を併記し、さらに西鶴の評語を記す。なお評語の下に付した番号は引用順を示す。

(西前)宵には泣て笑ふ明ぼの
掛乞に内義断りいひ仕舞

大晦日のせはしさ兼好が書出し　今のよの有様かはる事なし　亭主出ちがふて夜あけに　帰りて年とるさまおかし　(一)。

(西前)残して置ば気にかゝる宿
京の地を又踏命定めなし(二句め)

けふ祇園清水明日は嵯峨　御室此たび寺社を残らず　我国方が物がたりの　たねぞかし　(二)。

(西前)物隠したる朝貝の垣
秋夕若衆出立の乳はぢて(三句め)

正しく踊ごしらへの替りすがた　夜の編笠はかぶりものなり　其あとから坊主の釣髭　(三)。

以上三例を示した。

まず用例の一について、野間氏はこれを『胸算用』の巻二「訛言も只はきかぬ宿」の描写に類似すると指摘し(2)、さらに巻三の「神さへ御目違ひ」との関連を指摘されている(3)。

二については指摘がない。三についても同前である。但し野間氏は、右『難波みやげ』(以下上記のように表記する)の前句附において、初句前句の「心ながふも住る庵室」の附句の評語を、『懐硯』巻四「人真似は猿の行水」と同案とされ、次の前句の「ないに極る秋のゆくすゑ」の付句の、「分散に入らぬは萩の錦なり」という菊子の句への評語、

今ときは仕掛ものありて　身代をつふすなり　是は吟味してまことに　極まり女房の衣類　道具は算用の外とぞ

については、『胸算用』巻一「問屋の寛濶女」の記事に類似すると指摘されている(4)。

その他、この「西鶴翁点墨」には、『西鶴諸国はなし』の一篇(巻三「行水の宝舟」と、評語の「諏訪のうみ氷のうきはしを　狐のわたりて後人馬のかよひけると也」との関連)や、さらに『本朝二十不孝』巻三「当社の案内申程おかし」との関連(5)など、約めて言えば西鶴小説の脚注にあたるかのごとき文言が認められるとされるのである。

前述のごとく、『難波みやげ』は元禄六年正月刊で、この歳八月十日に西鶴は難波で没した。西鶴の文言が(つまり右の評語をふくめて)生前に公刊されたのはこの『難波みやげ』がさいごということになる。さらに当然のことながら右の評語は元禄六年以前の執筆であろうし、おそくとも元禄五年末のものと考えてよい。

さらに年譜と書誌によれば、元禄六年正月、つまり『難波みやげ』出版時点において、西鶴作の小説『浮世栄花一代男』が出版されていた。これも同年正月刊である。これとの関わりはどうかという問題がのこる。ここでは次の事実を示すにとどめて、もう少し状況報告をすすめることにする。

すなわち、同年正月刊『浮世栄花一代男』の版元は、京都油屋宇右衛門・松葉屋平左衛門、大坂雁金屋庄兵衛、江戸万屋清兵衛である。京の松葉屋と、大坂の雁金屋と、江戸の万屋と、それは俳書『難波みやげ』の版元とまさに同一の版元であること自明である。いま、もう一名の京の油屋については言及しないが、本書は西鶴作としてきわめて疑わしい内容の作であることも周知の事実である。

そこで元に戻すと、『難波みやげ』の評語を西鶴が書いたのは元禄五年末かという点は前述した。撰者静竹窓菊子の序文の日付は、「元禄五年　冬至」となっているし、彼は大坂北久太郎五丁町の前句附清書所の主人であり、元禄五年

十月、『大坂談林長點集』（『咲や木の花』）の後集として右『難波みやげ』を出版したことが明らかだからである(6)。

以上を整理していえば、1　『世間胸算用』と俳書『難波みやげ』の各内容には近似した要素があること　2　両書の出版書肆が、油屋をのぞいて同一書肆であること　3　しかも西鶴作としてはきわめて低調な『浮世栄花一代男』は、右の三書肆から出版されていること　などとなる。こうした状況は西鶴の死の八ヵ月前に現われたもので、これらの現象が示唆する問題は当然西鶴晩年の動向に関わってくる。

本稿は元禄三年後半から西鶴死没時までの年譜をたぐりながら、右の問題に私なりの解釈を試みるものである。

そこでまず、前引『難波みやげ』の引用の一についてだが、これは『胸算用』との類似が指摘されている。いま試みに右の一をふくめた三例と対比して、西鶴が元禄五年秋以降に作った『西鶴独吟百韻自註絵巻』から数例を引用してみる。句の下の番号は句順を示す。

一　大晦日其暁に成にけり(17)

商人の渡世いそかはしく町人の家〳〵は天秤十露盤の音高く大帳に付込一年中の算用つめとてかしかまし殊更夜の明る迄かけまはる事あり其暁と句作せしは高野山への付寄也

二　宮古の絵馬きのふ見残す(14)

見わたせは祇薗に平忠盛にとらへられし火ともしの大男おそろし清水に福録寿のあたまに階子をかけて肭を剃

所もおかし（下略）

心持医者にも問す髪剃て（15）

都のうちに借り座敷して養生心に叶ひ医者にたつねては今すこしといふを待かね一昨日は嵯峨御室の詠めに暮しきのふは東山なと歩行にてまはり寺社残りなく心静に此病人命ひとつは拾ひ物是から行末五百八十までの仕合

三　役者笠秋の夕に見つくして（3）

第三に芝居の楽屋帰りの気色を付よせける事（中略）

難波堀江の姿の花四座の舞子いつれかいやとおもふはひとりもなし（下略）

以上のようであるが、私には、右『独吟百韻自註絵巻』の付句および自註と、『難波みやげ』の西鶴評語のあいだに、微妙な関連とイメージの類似が認められるようにおもわれる。

『独吟百韻自註絵巻』の成立は未詳だが、元禄五年秋の西鶴熊野行の途次に、右百韻は成り、その自註は翌六年一月の『難波みやげ』刊行をあいだにはさみ、八月の西鶴死没までの間にあることはまちがいない。

ところで、右『独吟百韻自註』（以下このように略称する）には、その三十四句・三十五句の自註に以下のような文章があり、それは遺稿『西鶴織留』巻六の二「時花笠の被物」の後半部と、同巻六の三「子をおもふ親仁」の、連続する二つの章の話柄に近似しているのである。

右の『西鶴織留』の二章についてはすでに考察しているからいまは省略する(7)。

『西鶴織留』は遺稿であり、出版は没後一年弱、正確に言えば没後七ヵ月に出た短篇集であり、その版元も、くどいようだが大坂の雁金屋と京都の上村(松葉屋)であった。以上をふまえて、識者にはさらでものことだろうが、以下に『独吟百韻自註』の三十四句と三十五句の二句と自註を引用する。

鹿に連泣きすかす抱守(34)

紅葉に鹿は正風の付合なから桧に付寄のうとき物を付るよりは是いつとてもよし花に蝶水に蛙付よせ物也前句の作り花を子とものもてあそひに付なし鹿とつれ泣と句作り機嫌直しの花紅葉にいたせし抱乳母か才覚心なり

面影や位牌に残る夜半の月(35)

さなきたに秋は物かなしきに鹿の鳴音よりは哀なるは世の無常にそ有けるいまた物のわきまへもなき少年の母におくれて夕〳〵にたつねなけきしになきあとの位牌をおしえてかゝさまはあれにましますとおの〳〵袖の露ひる事なし

右のごとく、『独吟百韻自註』と遺稿『西鶴織留』と、さらに『難波みやげ』の西鶴評語と、それに『世間胸算用』と、四つの書のあいだには、その描写と文言に近似する要因が明らかに認められた。それだけではない。これらのうち公刊された三書(『独吟百韻自註』をのぞく)は、これもまた、大坂の雁金屋と京都の松葉屋の両書肆を主たる版元とする出版なのである。加えて死没年の数年前からの、西鶴にみられる俳諧への固執を注目せねばなるまい。こうして本稿

の視点は定着した。再度西鶴年譜を再読しながら、生前の動静を事実に即してふり返ることからはじめたい。

なお前述した『浮世栄花一代男』の版元のひとり油屋宇右衛門についてだが、彼は本書以外に出版物はなく、油屋を名乗る書肆で西鶴本を手がけているのは、京の書肆とは別に大坂の高麗橋筋西の油屋与兵エが、『西鶴織留』の正徳二年版を刊行しているのみである(8)。加えて『浮世栄花一代男』の再板は元禄十一年(一六九八)二月で、その版元は京の松葉屋と江戸の万屋彦三郎の両名であり、すでに油屋宇右衛門の名は刊記にない。つまり、本書の有力版元はやはり松葉屋とそれに副う雁金屋だったと考えて妥当だろう。

2　西鶴俳諧年譜の読みの試み

まず事実の報告を十七項に分けてする。

1　元禄三年(一六九〇)九月下旬　京の本屋半兵衛は加賀田可休撰『俳諧物見車』五巻五冊を版行し、そのなかで可休は点取俳諧への各俳諧師の評点を公開して、わけても西鶴の評点を非難した。

2　同年十月十四日　京の井筒屋庄兵衛は北條団水著『俳諧物見車返答特牛』一冊を版行、団水は本書で加賀田可休を駁論した。

3　同、十二月下旬　西鶴は上京、北條団水亭に両吟歌仙二巻を試み、いずれも半歌仙で止んだ。

中〳〵老の浪のよつてもつかぬぞ。句毎にめざめて、我又其心にうつしてあとよりおよぎつけども、とかく足のおもたく、やう〳〵歌仙の中ほど、瀬を越所にして止ぬ

と西鶴は書いた(『団袋』元禄三年刊序)。

4　これよりさき、団水は『特牛』のなかで語っているのだが、十月十一日御池通りの飛脚宿、早道六兵衛を大坂の西鶴庵に遣し、本書への加担を依頼した。これに対し西鶴は、

しかれ共、所存の義有之候間、貴辺御答ねがはくは、なくてありなん、こなたより、ゆる〳〵可申入候（『特牛』）。

と返書した。

5　元禄四年正月　『椀久二世の物語』上梓。但し本書は存疑本。

6　同年春　高野山住侶の如雲・知月以下計五名の百韻一巻に西鶴は引点を加えた(a)。これに西鶴は「難波俳林二万翁」と自署している。

7　同年八月　難波松魂軒の仮名で、『物見車返俳諧石車』四巻四冊を著わす。本文・挿絵自画自筆。本書の版元は、京の上村（松葉屋）平左衛門、江戸万屋清兵衛、大坂壽善堂の相板である。注目すべきであろう。

8　同年冬　山太郎なる俳人、自作の独吟歌仙一巻に西鶴の判を受け、これに自ら再判し、『山太郎独吟歌仙巻』（写本一冊）を公表し、西鶴を文盲と罵った。

9　元禄五年正月　『世間胸算用』刊。版元は前述のように、大坂伊丹屋、京上村（松葉屋）江戸万屋である。

10　同年三月四日　西鶴は備前のうちや孫四宛に書状を送った。孫四の俳諧添削依頼に対する返書で、これには次項三点の情報が読みとれる。すなわち、

a　本文によれば、「春夏に備前へ罷越候。其時分其元へも罷立寄、可申承候」という。

b　同、「今程目をいたみ、筆も覚不申候」という。

c　同、「此句の脇第三あそはし可被遣候／我発句也／桜影かなし世の風美女か幽霊か　西鶴」とある。

11　同年三月二十四日　盲目の一女法名「光含心照信女」死亡。

12　同年秋　これは陰暦だから愛娘の死後三ヵ月余の期間と推定する――紀州熊野に遊び、前引の「独吟百韻」一巻成る。

日本道に山路つもれば千代の菊

鸚鵡も月に馴て人まね

役者笠秋の夕に見つくして

の連句で始まる西鶴俳諧の総決算である。のちに西鶴はこの百韻に長文の自註を加え、さらに壮麗な挿絵を描き、これを豪華な巻子本に仕立てた。仕立てたのは後人かどうか。ともかく見事な絵巻である。

因みに西鶴没後の元禄七年(一六九四)六月刊の京井筒屋庄兵衛版の俳書『熊野がらす』一冊には、右『西鶴独吟百韻』のうち十八句が抜書きして所収されている。撰者は紀州熊野本宮の小中南水と玉置安之で、野間氏によれば、いずれも紀州熊野本宮の御師。西鶴の俳諧上の弟子だとする。

13　同年十月二十一日　西鶴は京の友人宛書簡の所書に、「大坂谷町筋四丁目すゞ屋町ひがしがハ、俳諧師西鶴」と記した(吉田幸一氏「新出の西鶴書簡紹介」による)(10)。元禄五年初冬のこの時期、『胸算用』を上梓刊行した西鶴は、その書簡にやはり〈俳諧師〉と記したのである。このことを改めて認識したい。

14　この年　月日未詳　真蹟巻子本『俳諧十二ヶ月帖』成るか。これは『俳諧十二ヶ月帖』(天和・貞享初年ごろ成立か)、『画賛草稿十二ヶ月』(天和年間成立か)とは異なる一巻である。

15　元禄六年正月　『浮世栄花一代男』刊(書肆等は前述)。

16　同年同月　『諸点難波みやげ』刊（書肆等は前述）。

17　同年八月十日　井原西鶴は大坂で没した。享年五十二歳。法名「仙皓西鶴」。寺町八丁目の浄土宗知恩院派誓願寺に葬られた。周知のように墓石右側面に、「下山鶴平北條団水建」と刻されている。周知のことをあえて記したのはほかでもない。下山鶴平は心斎橋筋北久宝寺町の「物ノ本ヲヒサグヲ業トス」（『誹家大系図』）る本屋であり、団水は直系の弟子であって、西鶴そのひとの身寄り身方の名はここにまったく見当たらないことを確認したかったからである。

野間光辰氏の『年譜考證』（補訂版）では、この項、事実を報告しつつその墓碑の移動の経緯、瀧沢馬琴の墓参、幸田露伴の訪墓の各機会における、西鶴墓碑の無惨な状態を、淡々と叙している。その報告がいっそう西鶴墓碑の無縁墓化のありようを切々と伝えて痛ましい。野間氏は右項の補註にいう。「またその死因は、同じく（筆者注『こゝろ葉』追善発句、宝永三年刊）、鷺助の追善発句に「虚労裡にふるきあはれを秋の風」とあるから、酒色過度による身心の疲労衰弱死であつたやうである。」（『年譜考證』489頁）と。

以上、西鶴年譜を被見いただければお判り願える事実で、さらでものことに筆者は紙幅を割いた。弁解すれば右の事実認識に私見私解があるからで、上述十七項目の西鶴の動静を前提としながら、以下、右の年譜資料を解読する作業に入ることにする。

3　出版書肆の離合

前章までに見てきた俳諧を中心とする西鶴の動向に加えて、以下は、西鶴の作家活動と西鶴本出版書肆の動静とをま

（附表Ⅰ）

年号	西暦	年齢	書名
貞享　五（九月改元）	一六八八	四七	正月　『日本永代蔵』（六巻）刊。 二月　『武家義理物語』（六巻）刊。 三月　『嵐無常物語』（二巻）刊。 九月以前　『好色盛衰記』（五巻）刊。
元禄　元	一六八九	四八	十一月　『新可笑記』（五巻）刊。 正月　『本朝桜陰比事』（五巻）刊。 正月　『一日玉鉾』（四巻）刊。 三月　磯貝捨若作『新吉原常々草』（一代男世之介の名で注を加える。西鶴の版下・挿絵）刊。
二	一六九〇	四九	八月　難波松魂軒の名で『俳諧石車』（西鶴の版下・挿絵）刊。
三	一六九一	五〇	正月　『世間胸算用』（五巻）刊。
四	一六九二	五一	三月二十四日、法名光含心照信女没。 秋　紀州熊野に遊び、「日本道に山路つもれば千代の菊」を発句とする独吟百韻成る。後これに自註を加え、絵巻『独吟百韻自註絵巻』成る。
五			八月十日、大坂にて没。享年五十二歳。法名は仙喆西鶴。寺町誓願寺に葬る。辞世の句は、「浮世の月見過しにけり末二年」。 冬　『西鶴置土産』（五巻）刊。
六	一六九三	五二	三月　『西鶴織留』（六巻）刊。
七	一六九四	没一	

ず検証する。

附表Ⅰにみられるごとく、元禄元年（貞享五年）の、西鶴本の大量出版ののち、翌二年三月に『新吉原常々草』刊行後、表にあるように、元禄五年正月までの二年九ヵ月、ほぼ三年間、西鶴には浮世草子述作出版の事実はなかった。そこで想起されるのが、前述の、元禄三年十二月下旬の、西鶴・団水両吟半歌仙における西鶴の言（前章の項目3参照）である。第二には元禄五年三月四日の、備前うちや孫四宛書簡での、西鶴の病弱の情報と、あの発句の凄愴の気味合いであろう。

ここでは私は続けて附表Ⅱを例示するが、貞享五年（元禄は同年十月改元）正月、『日本永代蔵』が出版されたとき、その初版の刊記の末には、『甚忍記』五部八冊（仁之部・義之部・礼之部・智之部・信之部）が、ちかぢか「板行仕候」と予告されていたのである。さらに『永代蔵』の版元は、京の金屋長兵衛、江戸の西村梅風軒、大坂の森田庄太郎で、主たる版元は森田であった。森田単独版を推定する説もあるほどだから（野間氏『年譜考證』参照）、金屋と西村は売捌元と考えてもよい。以上の事実を再確認して次に進みたい。

右『日本永代蔵』巻末刊記の近刊予告記事の、『甚忍記』五部八冊の出版は、このあとついに発刊されることがなかった。以来こんにちまでいわゆる『甚忍記』の行方について、さまざまな推論が提出されてきている。そのことはいま私に語るべき資料を持っていない。それよりも、もういちど附表のⅡを御覧いただきたい。この表に見られるごとく、『日本永代蔵』の出版元である、大坂の森田、京の金屋、江戸の西村の三書肆は、以後の西鶴本出版書肆からその名がまったく消えてしまうのである。大坂の書肆森田庄太郎は、こと西鶴本に関しては、貞享二年の『椀久一世の物語』、同年『段物集小竹集』、同三年の『好色五人女』、そして同五年『日本永代蔵』と、貞享年間の西鶴本最流行期を支えた

（附表Ⅱ）　西鶴本の出版書肆

年号	書名	書肆
天和二年（一六八二）十月	好色一代男	大坂荒砥屋孫兵衛可心
貞享元年（一六八四）四月	諸艶大鑑好色二代男	大坂岡田三郎右衛門
二年（一六八五）正月	西鶴諸国ばなし	大坂岡田三郎右衛門
二月	椀久一世の物語	大坂森田庄太郎
八月	段物集小竹集	大坂森田庄太郎
三年（一六八六）正月	近代艶隠者（西鶯作）	大坂河内屋善兵衛
二月	好色五人女	大坂森田庄太郎
六月	好色一代女	大坂岡田三郎右衛門
十一月	本朝列仙伝（玄順作）	大坂岡田三郎右衛門・江戸万屋清兵衛
四月（一六八七）正月	本朝二十不孝	大坂岡田三郎右衛門・大坂千種五兵衛・江戸万屋清兵衛
正月	男色大鑑	大坂深江屋太郎兵衛・京都山崎屋市兵衛
三月	懐硯	出版書肆不明
四月	武道伝来記	大坂岡田三郎右衛門・江戸万屋清兵衛
五月	西行撰集抄	大坂河内屋善兵衛
五月（一六八八）正月	日本永代蔵	大坂森田庄太郎・京都金屋長兵衛・江戸西村梅風軒
二月	武家義理物語	大坂安井加兵衛・京都山岡市兵衛・江戸万屋清兵衛

三月	嵐無常物語	出版書肆不明
六月	色里三所世帯	出版書肆不明（尚、元禄九年以降刊の書籍目録には大坂雁金屋庄兵衛板とある）。大坂雁金屋庄左衛門か。
（九月改元）九月以前	好色盛衰記	大坂江戸屋荘右衛門・江戸平野屋清三郎
元禄元年（一六八八）十一月	新可笑記	大坂岡田三郎右衛門・江戸万屋清兵衛
二年（一六八九）正月	一目玉鉾	大坂雁金屋庄左衛門
正月	本朝桜陰比事	大坂雁金屋庄左衛門・江戸万屋清兵衛
三月	新吉原つねづ〳〵草	大坂深江屋太郎兵衛
五年（一六九二）正月	世間胸算用	京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛・大坂伊丹屋太郎右衛門
六年（一六九三）正月	浮世栄花一代男	大坂雁金屋庄左衛門・京都松葉屋（上村）平左衛門・京都油屋宇右衛門・江戸万屋清兵衛
八月死去	西鶴置土産	大坂八尾甚左衛門・京都田中庄兵衛・江戸万屋清兵衛（初版本は大坂富士屋長兵衛版か。）
冬		
七年（一六九四）三月	西鶴織留	大坂雁金屋庄左衛門・京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛
八年（一六九五）正月	西鶴俗つれづ〳〵	大坂八尾甚左衛門・京都田中庄兵衛
九月（一六九六）正月	万の文反古	大坂雁金屋庄左衛門・京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛
十二年（一六九九）四月	西鶴名残の友	刊記に「浪花書林開板」とあり、詳細不明

有力書肆のひとりであった。この時期、『諸艶大鑑（好色二代男）』（貞享元年）、『西鶴諸国はなし』（貞享二年）、『好色一代女』（同三年六月）、『本朝列仙伝』（玄順作、西鶴関与、同十一月刊）、『本朝二十不孝』（貞享四年正月刊）、『武道伝来記』（同年四月刊）と続刊した一方の有力書肆岡田三郎右衛門も、附表Ⅱに見られるごとく、『日本永代蔵』が書肆森田らによって板行された年の十一月に、『新可笑記』を発行したのをさいごに、西鶴本出版からその名を消すのである。

岡田三郎右衛門が終わりに手がけたのは、『武道伝来記』と『新可笑記』である。これもいささか関心を持たせるが、ここでの問題は、西鶴本の有力出版書肆たる森田と岡田という二軒の大坂の版元が、西鶴の許から離れたという事実である。一証を例示すれば森田は『日本永代蔵』板行後も精力的に良書を刊行した。

元禄五年十二月　『和漢朗詠集』二巻

同　六年十二月　『頭書和漢朗詠集諺解』十巻　岡西惟中撰

同　七年十月　『人鏡論（金持重宝記）』

などである。だから森田庄太郎なる書肆が経済的に西鶴本出版不能に立ちいたったという理由は推測できない。

以後、西鶴本は附表Ⅱに見られるごとく、大坂では雁金屋（庄左衛門・庄兵衛の二名）西鶴没年の元禄六年正月まで、主流をなして行く。この間、附表Ⅱに見る書肆の深江屋太郎兵衛については、その動向をすでに考察したのでここには触れない(11)。拙論の「『万の文反古』の成立――上村系西鶴本をめぐって――」と、「『色里三所世帯』と『好色兵揃』」の両論(12)によって、上村平左衛門（松葉屋）系の出版書肆の出版商業主義の実状を御検察いただきたい。

こうして以後の西鶴本出版には、元禄二年ごろから京では松葉屋（上村）が、大坂では雁金屋庄左衛門が実権を握って

行くことになる。言ってしまえば西鶴本の出版担当書肆の主権が交替したということに他ならない。

ところで、元禄三年以後、上記の資料および年譜上の報告で御覧いただけたように、西鶴は、しきりに「二万翁」(高野山住侶の五吟百韻への引点の自署、二章の6項参照)と自署したり、「俳諧師西鶴」と自署(元禄五年十月二十一日書簡所書、二章13項参照)している。この時期、『俳諧石車』(以下上記のように略称)を、精力的に出版し(それも団水との歌仙が半歌仙しか巻けないほど俳諧創作力が衰えつつあるのに)、さらには成立次不明ながら元禄五年度に『俳諧十二ヶ月帖』も仕立てた。

以上の事例をあらためて読み直すとき、この時期、元禄二年から五年までの西鶴は、明らかに〈俳諧師〉であろうとし、二万翁西鶴、俳諧点者、つまりは浮世草子作者ではないという自己顕示的意識を示そうと努めた。西鶴はこの時期、俳諧師西鶴を出版界に再認識させようとしたのではないか。年譜上で、圧倒的に俳諧上の作物が多いのも傍証となる。

ではなぜ元禄五年正月、『世間胸算用』は出版されたのか。附表Ⅰでお判り願えるように元禄二年初めからこの歳まで約三年近く西鶴に浮世草子の述作上梓はなかった。従来、研究者が説いているように、西鶴の病弱による散文作品への創作力減退、自己の俳諧への上記さまざまな非難や誹謗への戦闘的な対応、などなどを考えると、『胸算用』の上梓はやはり多少の疑問を含んでいると言えるだろう。これについても研究者に考察は多い。信多純一氏の論考(13)は当然想起すべきだが、上述の問題とは関連していない。しかしながら、『世間胸算用』の各巻目録の、章題左傍の小見出し文には、その二行めに冒頭かならず「大晦日の振手形如件」(巻一の一)のように、「大晦日の」の文言が記載されているのに、それは巻三までにとどまり、巻四・巻五の二巻では、「地車に引隠居銀」(巻四の一)、「いにしへに替る人の風俗」(巻五の一)などと、「大晦日の」の文言が消えているのはすでに知られているし、信多氏の所論にみるごとく(14)、

その編集上にもいくつかの、出版書肆側の彌縫策が検索されているのである。

短絡化して言えば、『世間胸算用』は明らかに旧稿を整理補筆して、年の終わりの一日に状況を集約し、短篇小説集としての体裁を整えた作品であった。一年後の『浮世栄花一代男』の惨憺たる作柄からみても、『世間胸算用』は、当期の西鶴が浮世草子述作上梓に、渾身の精力を傾けた力作と考えざるをえない。本作中の各章に、いわゆる『甚忍記』の草稿が利用されたのかどうかは不明である。『甚忍記』草稿の行方についてはいまの私に報告できる資料はない。ただ、あの『日本永代蔵』刊記にみる近刊予告の記事に、

人は一代名は末代

とある一句の宣伝文句がやや気掛かりである。

たとえば西島孜哉氏が説くごとく、貞享四年（一六八七）刊の『武道伝来記』（江戸、万屋清兵衛・大坂、岡田三郎右衛門の相板）の刊行にみる経緯と書誌的事実の矛盾が想起されねばならない(15)。西島氏はその力作たる論文で、『永代蔵』巻末予告の『甚忍記』八冊は、仁・義・礼・智・信の五部仕立てが、草子構成上の〈趣向〉に類するものであり、右の五常を『甚忍記』の行方と関連させて追求することは不合理ではないかと論究された。すなわち氏は『甚忍記』が書肆森田庄太郎からついに出版されなかった事実について、『武道伝来記』の草稿の残余が、『甚忍記』の構想と矛盾するために、新しく『武家義理物語』（大坂、安井加兵衛・京都、山岡市兵衛・江戸、万屋清兵衛、相板）として構想をたて直したものだろうと推論する。氏はいう。

ここで「甚忍記」の刊行予告を付した『日本永代蔵』の版元、森田庄太郎との関係は推測以上に出ないが、そこに「甚忍記」の刊行をめぐって亀裂が生じたのではないかと想像される。―中略―とすればやはり「甚忍記」をめぐ

り、西鶴と森田の間に何らかの確執があり、そのこともあって、「甚忍記」を『武家義理物語』と変更して、別の書肆から出版したと考える妥当性があるといえよう(16)。

と。書肆森田と西鶴との関係が常態を逸したと推測する西島論文は本稿においてきわめて有効である。たしかに前出の「人は一代名は末代」なる宣伝文句と、「仁・義・礼・智・信」なる五常を掲げた八冊の『甚忍記』刊行予告は、その文言から〈町人物〉浮世草子のイメージを想像するにやや困難ではある。

はたして西島論が妥当かどうか、それは別の機会に俟つつもりだが、とまれこの時期西鶴が、永年にわたる馴染みの書肆と離別したのはたしかであり、そのことが、京の書肆松葉屋(上村)と結び付く縁を作ったのも事実であった。その流れが大坂の雁金屋との接近にも作用する。

『世間胸算用』出版までの経緯については、右のような状況を視野に入れて、さらに考究を深めるべきであろう。つまりこの時期、西鶴の周辺は俳諧壇からの誹謗と論難、加えて浮世草子執筆への意欲減退、さらに創作能力の低下、そして年来の出版書肆との離反という憂鬱な課題が重なっていたのである。年譜にみるように、西鶴は目を病みこの年三月末に一女を先立たせる。それは亡妻の十七回忌の翌春のことでもあって、秋に紀州熊野に旅立つのも故なしとしない。

4　面影や位牌に残る夜半の月

松葉屋平左衛門と井原西鶴の交渉のみを述べてきたが、西鶴遺稿の出版については、附表Ⅱにみられるごとく、没後早々に刊行された『西鶴置土産』と、元禄八年(一六九五)正月刊の『西鶴俗つれ〴〵』の二作品が、弟子北條団水に深

くからむ出版書肆の手で上梓されている。大坂の八尾甚左衛門と京都の田中庄兵衛である。これについてはすでに報告した(17)。

現在までの調査では、松葉屋と雁金屋と、この二書肆と北條団水との接近は認められない。ここにも西鶴没後の、書肆と弟子団水とのさまざまな確執やら交渉やらの関わり合いが想定できるようにおもわれる。

以上、すべて既知の事実を基に私なりの整理から状況証拠を提示してみた。以下に結論をまとめる。

時期が元に戻るが、天和二年(一六八二)三月二十八日、西鶴の師西山宗因が没した後、難波談林の後継者は、大坂一時軒岡西惟中か西鶴かと目されていた。それが一年前に愛妻を亡くした岡西惟中は、俳諧への意欲を失ない妻の実家のある岡山訪問をふくめた、中国・四国地方の俳人・連歌師歴訪の旅に出てしまう。このころの西鶴は『好色一代男』の成功や矢数俳諧の興行などで得意だったから、失意の惟中などさして気にもかけなかったろう。それに前記うちや孫四をふくめて中国筋には西鶴の俳諧仲間が多くいた。

それから歳月を経て元禄五年秋、西鶴は一女の死後熊野へ旅立つ。なぜ熊野なのか。この疑問は解けそうにない。そこで再度熊野での『西鶴独吟百韻』だが、その五十五句めからの六句を左に引用する。

師恩しる枕に替る薬鍋
願ひに秋の氷取行
吉野帋さくら細工に枩させ

鹿に連泣きすかす抱守

面影や位牌に残る夜半の月

廻国に見る芦の屋の里(18)

西鶴の死に後れること一年の元禄七年十月十一日の晩、翌日の死を前に松尾芭蕉は弟子丈艸の詠んだ、「うづくまる薬の下の寒さかな」なる句を「出来たり」と賞めた(19)。右の西鶴吟の一句めはそういう状景を連想させる句作りであり、同趣旨の句柄でもある。句はそこからやがて吉野を点出させ、鹿の妻恋う声から抱守りを出し、亡妻の面影を月の座で描き、廻国行脚の旅人を詠む。いま西鶴の自註を無視して連俳それ自体を自由に読むとき、私は西鶴における熊野行が、亡妻および亡女との蜜月の旅におもえてならない。そのとき西鶴はかつてのライバル岡西惟中の中国行を思い出したかどうか。野田寿雄氏が説かれるように、井原西鶴が紀伊を出自とするのかは、まだ私に結論は出ない(20)。それに西鶴の亡き妻が和歌山に実家があったというのも推測の域を出ないように考える。だが、西鶴が熊野へ旅し独吟百韻を詠んだのは事実だし、その後かどうかはこれも不明だが、辞世の句、

浮世の月見過しにけり末二年

が生前すでに用意されていたのも事実としてよいだろう(21)。柿本人麿の伝辞世歌との暗合は野間光辰氏の指摘にとどまらず、たしかに西鶴の意図によって作句された辞世句だと私は考える。そのとき、キイワード「見過し」の意味内容は、はたしてなんだったのだろうか。たとえばこの語の伝える読者への発信を、現行の古語辞典が示す意味に限ってよ

いのかどうか。私はこの「見過しにけり」の一句に、上述年譜が物語ったような晩年の悪戦苦闘と孤独な生活に耐えた作家の、「末二年」間の索漠たる精神構造を見るのであり、結句、俳諧に回帰するほかなかった詩心と、西鶴の、いわゆる〈無念〉のおもいを読もうと考えている。

【注】

(1) 野間光辰氏『増補西鶴年譜考證』(中央公論社刊、昭58)当該項参照。

(2) 同氏補註の『定本西鶴全集』(中央公論社刊、昭25)13巻「句評集」410頁頭註。

(3) 同氏の、注1の項の記事参照。

(4) 右2の頭註参照。

(5) 西鶴の前句「宵には泣て笑ふ明ぼの」(前31)の二句めの附句、「あれが親脊女(ゼ)を殺して銀を取」の評語への指摘。

(6) 野間氏前引の年譜考證の当該項参照。

(7) 小論「『西鶴織留』と出版書肆」、野間光辰氏編『西鶴論叢』(中央公論社刊、昭50)参照。いわゆる乳母咄であり、妻を早く失した男が、乳呑児を抱えて乳貰いに歩き、また男の甲斐性なさから乳母奉公に出た女の哀れさを綴った一連の小篇で、『世間胸算用』巻三の「小判は寝姿の夢」と密接に関わっている。

(8) 矢島玄亮氏『徳川時代出版者出版物集覧』正続(万葉堂書店刊、昭51)・井上隆明氏『近世書林板元総覧』(『日本書誌学大系14』、青裳堂書店刊、昭56)参照。

(9) 野間氏前引『年譜考證』には、この五名は高野山「三宝院を中心とする高野山内の僧侶衆かと想像され」るとある。

(10) 『定本西鶴全集』第十一巻下附録、「西鶴研究」第十五号所収(中央公論社刊、昭50)参照。吉田氏はこの文中、「西鶴の谷町筋への転居は、元禄元年(一六八六)以前であったと考えられる。」と述べられ、野間氏また『年譜考證』で「結論としては、私はやはり移居説に賛成する。」とされた。筆者は本稿の視点から、右の報告の他に、本文に説くごとく、署名に〈俳諧師〉と記した西鶴を注目したいのである。

(11) 檜谷著『井原西鶴研究』(三弥井書店刊、昭59)所収、「貞享五年の西鶴本」ほか参照。
(12) 右同書所収論文。私はそこで、西鶴没後の遺稿出版について、この本屋がまことにあざやかな企業イメージで、読者の心理をつかもうとしたか、を分析したつもりである。
(13) 信多純一氏「『万の文反古』切継考」(野間光辰氏編『西鶴論叢』所収、中央公論社刊、昭50)参照。
(14) 前項と同じ。
(15) 西島孜哉氏「『武道伝来記』論」(『武庫川女子大学紀要　文学部篇』第31集所収、昭59・2)参照。
(16) 右論文の四「残余の草稿の行方」参照。
(17) 小論「『色里三所世帯』と『好色兵揃』」(檜谷『井原西鶴研究』所収)参照。ここで筆者は松葉屋系と八尾系の二派の書肆が、没後の西鶴本出版に関して、商品としての〈西鶴〉を売り出したのであり、とくに晩年の西鶴と結んで西鶴本を出版した松葉屋と雁金屋の二書肆が、「死期近い孤独な作家にとって」、「なにほどかの支えであったろう」との推測を述べた。
(18) 以上この百韻の引用はすべて『定本西鶴全集』第十二巻所収の『西鶴独吟百韵自註絵巻』によった。
(19) 向井去来の「丈艸ガ誄」による。
(20) 野田寿雄氏「井原西鶴の家系について」(『野田教授／退官記念　日本文学新発見　研究資料』所収、笠間書院刊、昭51・3)・「井原西鶴の家系再考」(『青山語文』11号所収、昭56・3)参照。
(21) なぜなら末五「末二年」は、西鶴が元禄六年中は少なくとも生きている意志があった表明とも読みとれるからであり、『反古集』にいう「浮世の月見すくしにけり後二年」にせよ、『末若葉』所収の「末二年浮世の月を見過したり」にせよ、そこには伝柿本人麿の辞世歌、「石見のや高角山の木の間よりこの世の月を見果てつるかな」又は「浮世の月を見果てつるかな」(『定本西鶴全集』第十二巻『新編　西鶴発句集』当該項の頭注参照)などの諸伝との関わりや、右人麿歌の背後に連想される人麿の石見の妻への愛惜の念が当然のことながら想起されてしかるべきだからである。

[付記]
右の稿は、昭和六十一年六月七日(土)午後二時十分から六十分間、国文学研究資料館(東京都品川区豊町)の大会議室において、第二十四回公開講演会の講演として発表した同題の草稿をもとに作成したものである。
会後に市古貞次・野田寿雄両先生をはじめ諸先輩、諸賢の有益な御教示を得た。記して御礼申し上げる。